

『「信仰共同体」と共に
生かされる』

クララ Sr. 林 明恵

私は、幼児洗礼でキリスト信者となった。

幼児洗礼者は、両親に連れられて日曜のミサに行き、日曜学校でなんとなく楽しく過ごし、中学生頃からだんだん教会から足が遠のき、二十歳頃には「盆と正月」ならぬ「復活祭と降誕祭」のみの教会参加となるパターンが多く見られる。

私もその例外ではない。何か毛嫌いしていたところがあった。映画やゴスペル音楽、クリスマスノアでやかさなどに見るかっこいいキリスト教のイメージと、いんちきな宗教団体の盲目的信徒になりたくないという思いが交差していた。

ところが、十代の終わりにあるきっかけで黙想を始めた。これが私にとって最初の神との意識的な対話の始まりだった。それはまる

で新たに洗礼を受けたようだった。それからずっと信仰探求の旅をしている。「三步進んで二歩下がる」ようにゆっくりだが、今では神の存在がなくてはならないものになってしまった。今思うと、どんなに遠くに行こうとも、どんなに反抗してみても、なぜか教会に戻されていた事に気付く。私の性格・体・魂・心、私の家族・環境・友人、全てを使つて私を呼び寄せるのだ。

ところが、今度は神と自分だけの関係から、「共同体」も含めた関係が求められるようになった。家族、学校や友達などの関係もある意味「共同体」ではあるが、その枠を超え、神によつて集められた「信仰共同体」と、一緒に生きていくというのだ。昔は正直、抵抗を感じていた。狭い世界の中で、限られた人と生活をするのではないかと。だから自由もなく、いざ、自分が無くなつてしまうのではないかと。しかし、自分だけで築き上げてきたと思つていた神との関係も、実は不特定多数のカトリック共同体に受け入れ、支えられ、受け皿となつてくれていた事に気付く。所属教会、ボランティア

ア団体、黙想のチーム、学校、修道会、日本だけでなく他の国でも

二〇〇六年司教年頭書簡にある幾つかの質問は、私に問う。教会共同体において、どんな役割が果たせるのか。ともすると、教会運営・経済・組織的な事・合理性・能力・即効性などだけに終始しそうな「役割」であるが、実はもっと身近で、地味で、ゆつくりで、めんどうくさいような事が多分にあることに気付く。司教は、「まづはお互いに耳を傾けること、司祭と信徒又は信徒間の対話、民族・

国籍の違う人との対話」を指摘している。

先日、某修道会の老司祭がこんな事を言っていた。「信仰を守るのではなく、信仰に生かされた生き方を」と。神の計らいは、とても大きく大きい。だから、せめて私がたくさん恵みに少しでも応えんとするならば、お互いに聴きあうことかもしれない。それぞれに働かれる神の恵みを知り、確認し、一緒に聖体に向かうことで一致し、それからそれぞれにいたいた恵み・タレントが生かされるのではないかと思う。

